

「うちの病院では安全な医療を提供しています」という文句。あるいは「完全に安全な医療を提供しなければならない」という気持ち。「安全管理(safety management)をするのだ」という考え。... このようなムードが現在の日本の医療界の空に暗雲のように垂れかかっている

たしかに、ある種の治療は正しく行えば、安全に行えるものが散見されます。しかし、治療を受ける患者には個体差も大きく、その詳細を完全には理解できない。例えば、ある患者にはたいした出血もなく無事行えた手術が、他の高齢な患者ではそうならないこともある。治療薬の予期せぬ有害作用が全くない、と言い切れるのは神様だけ。すべてのお産が完全に安全に実施できる産科技術は世界のどこにも存在しない。....

人体は人間にとって永遠に不可知な神秘の世界に満ち満ちている。患者の抱える病状の将来を普通の人間である医療者の誰もが完全に予測はできない。すべての患者に何が起きるかをすべての医療者が予測できる？

「安全管理を実施すること」は美しく、甘い罠。従って、医療訴訟をおそれる医療機関は「うちの病院は安全な医療を提供する」という殺し文句を看板に掲げる。そこでは、完全な予見が不可能な医療の世界であるにもかかわらず、「100%安全な医療をすべての患者に提供すべきだ」という目標が医療安全管理者の理想と誘導される。医療の原理からすると、安全管理はでき難いにも拘わらず.... つまり「安全管理をすればすべて収まる」という安直な話は「安全神話」であり、眉唾物。詐欺でもある。患者・家族が「安全と言ったではないか。裏切られた。嘘つき。裁判する」と憤るのは当然。「大丈夫」という文句を安易に使った結果が、身から出た錆の世界。

リスクに挑戦している努力が医療の真実であり、そのために重病患者が無事完治すると医療者と患者の努力の勝利となる。ハイリスクな医療行為であるほど、「安全第一」というスローガンが当たり前。医療安全の看板は「安全管理」ではない。「安全第一」をスローガンとすべきでは？ 「安全管理」が日本の医療界に巨大な安全神話を生み出しつづけている。

事故を隠さず、良心に従って報告せよ、というアメリカの安直なスローガン。「事故隠し」は刑法では重罪であることをアメリカの医療界は語っていない。

医療安全文化の老舗であるアメリカとイギリス。どちらも医療事故は一向に減らず、その中心人物たちから「日本の医療の方が進んでいるのでは」と日本へ期待を寄せる声を聴いて仰天し、椅子から転げた。

イギリスでは医療安全の専門教授は数名。日本では100名以上の医療安全の教授。100名以上の医薬品安全管理の教授。50名以上の医療安全の看護系教授。全国津々浦々での医療安全管理者、医薬品安全管理者、医療機器安全管理者。日本政府の努力もあって、日本の医療安全のインフラは世界一になりつつある。日本の医療安全が世界をリードできる体制が整いはじめている....

それには安直な「安全神話」の妄想から脱出することが最初の一步。医療者はリスクと日々真剣に戦っていることが真実。「安全第一の医療」が真実の姿でしょう。「患者安全管理 (patient safety management)」はでっち上げの世界、「患者安全第一 (patient safety first)」は実行可能。「安全管理主義の病院」へは行かない。「患者安全第一の病院」は、努力されているのだなあ、とすんなり患者に納得される。「患者安全第一」であれば、すべての医療者にとって日常の考え。「安全管理」はどこかの部署にやらせておけ、となる。安全第一主義は職員の自由な発想を育てる。しかし、安全管理主義は院内へ新たな医療ファシズム(=強制ガバナンス)を生じ、職員に拒絶される顛末となる。イギリスの臨床ガバナンスがその代表事例で、英国患者安全庁は2012年に解体。

安全神話化の度合いは、己の病院の重大事故の履歴を振り返ればわかる。

医療安全は医療機関の縁の下の力持ち。医療安全は医療の暗闇へ光を投げかけ、社会の光と希望。日本の医療安全界の若い世代の方たちが、世界における患者安全の舞台で大活躍する扉が今開きはじめた。